



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ハイダ語の使役について
Author(s)	堀, 博文; Hirofumi, HORI
Citation	北方言語研究, 2, 91-114
Issue Date	2012-03-26
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/49253">https://hdl.handle.net/2115/49253</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	07hori.pdf



## ハイダ語の使役について\*

堀 博文  
(静岡大学)

### 1. はじめに

ハイダ語<sup>1</sup>には、動詞がとり得る名詞項の数を増やす接辞として、*tlə-*、*giy-* (以上、接頭辞) と *-da* (接尾辞) の三種類がある<sup>2</sup>。それらのうち、*tlə-* は、手段接頭辞の一種であるが<sup>3</sup>、後二者は、いわゆる使役専用の接辞としての機能を有する。本稿では、これらの接辞をまとめて使役接辞と称する。

本稿は、三種類の使役接辞によって派生された使役構文の特徴について概観し、これらの使役接辞の間にみられる差異について、動詞の結合価、それらの接辞同士の共起可能性、使役者・被使役者の有生性、意味の観点から記述することを目的とする。

### 2. ハイダ語における使役文

本節では、1項動詞の主語を S、2項動詞の主語を A、2項動詞の目的語を O とし (参考: Dixon 1994)、使役接辞が付加された際の構文上の特徴について記述する。

ハイダ語は、いわゆる孤立型の言語であり、節において S や A、O となる名詞句に格標識が付かず (但し、後にみるように、動詞によっては O となる名詞句に標識 [後置詞] が付くことがある)、また動詞の中においてもそれらの統語関係を示す標識がない。従って、1項動詞の場合は、使役接辞が付加されても、使役者 *causer* と被使役者 *causee* (すなわち、もとの節の S) には標識が一切付かず、その両者の関係は、専ら語順で示される。例えば、(1a) に使役接尾辞 *-da* が付加された (1b) において、2つの名詞句 (*Tony* と *Ben*) のうち、

---

\* 本稿をなすにあたり、ハイダ語に関する貴重な資料を与えてくださった、次の話者の方々にお礼申し上げます (ABC 順): Mrs. Diane Brown, the late Mr. Gordon Cross, Mr. Roy Jones, Mrs. Doreen Mearns, Mr. Norman Price, the late Mr. Watson Pryce, the late Mrs. Eleanor Russ, the late Mr. Jonny Williams, the late Mr. Ernie Wilson, the late Mr. James Young, the late Mrs. Ada Yovanovich. また、本誌の査読者二名の方には、貴重なコメントをお寄せくださったことに対し、心から感謝申し上げます。本稿は、科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 「ハイダ語の形態統語法に関する包括的記述研究」 (研究代表者: 堀 博文, 課題番号: 22520429)、同 (基盤研究 (B)) 「北アメリカ北西海岸先住民諸語の自然談話にみられる複文の調査研究」 (研究代表者: 渡辺己, 課題番号: 23401024) の援助による成果の一部である。

<sup>1</sup> ハイダ語は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州北西地域のクィーン・シャーロット諸島とアメリカ合衆国のアラスカ州南東部で話される言語である。方言は、大きく分けて、北方方言と南方方言があり、本稿で扱うのは、南方方言に属するスキドゲイト Skidegate 方言である。

<sup>2</sup> 実際には、使役的な機能を有する接辞として、手段接頭辞のひとつである *kil-* (本来は「声で」の意味)、接尾辞の *-χat* (~*-χal*) がある。いずれも意味的には、ここで扱う *giy-* に近いが、このうち *kil-* と *-χat* は、使役者・被使役者ともに有生物 (人間) でなくてはならない点において、ここで取り上げる三種の使役接辞よりもその使用が限られている (Enrico 2003: 1116f. も参照)。これらは、「命令する」と訳されることが多く、純然たる使役とは少し離れているので (参考: Shibatani 1976)、ここでは、考察の対象からははずすこととした。

<sup>3</sup> 以下、本稿では、手段接頭辞 (INSTR) と解釈し得る場合を除き、グロスにおいては、*tlə-* に対して CAUS と付す (略号については、下記参照)。

前者が使役者（以下、一重の下線で示す）、後者が被使役者（以下、二重の下線で示す）であることは語順によって示される<sup>4</sup>。

(1) a. *Ben qagən-gən*

Ben be.safe-PAST

Ben was safe.

b. *Tony Ben qagən-da-gən*

Tony Ben be.safe-CAUS-PAST

Tony saved Ben.

使役者と被使役者は、統語的にはそれぞれ主語と目的語であるが、語順は、目的語に統語関係を示す標識がない場合の他動詞文と全く同じである。この使役者と被使役者の配列順序は、他の使役接辞が付加された場合においても同様である。

(2) a. *Ben ηaysdlə-gən*

Ben be.cured-PAST

Ben was cured.

b. *Tony Ben tlə-ηaysdlə-gən*

Tony Ben CAUS-be.cured-PAST

Tony cured Ben. [tlə- の場合]

(3) a. *Ben q'əw-ʔu-gən*

Ben sit-SG-PAST

Ben sat down.

b. *Tony Ben giŋ-q'əw-ʔu-gən*

Tony Ben CAUS-sit-SG-PAST

Tony let Ben sit down.<sup>5</sup> [giŋ- の場合]

しかし、被使役者（すなわち統語的には目的語）となる名詞句が無生物の場合は、次例に示すように、二通りの語順（(4b) と (4b'））が可能である（tlə- の場合でも同様である。また、3.1.3 で述べるように、giŋ- による使役文は、被使役者に無生物をとることができない）。

<sup>4</sup> ハイダ語例における略号は次の通りである：AG: agentive, Ag: agency, CAUS: causative, CL: classifier, COMP: complementizer, Ctrl: control, DEF: definite, DUR: durative, EMPH: emphatic, EPEN: epenthetic vowel, EVD: evidential, FOC: focus, HABIT: habitual, INDF: indefinite, INFO: information, INSTR: instrumental, INTRAN: intransitivizer, NEG: negative, NOM: nominalizer, OBJ: objective, PL: plural, PP: postposition, RECIP: reciprocal, REFL: reflexive, SG: singular; -: affix, =: clitic, +: haplology。グロス中における [ ] は、形態音韻的規則による2つの形態素の融合を示す。尚、他の資料からハイダ語スキドゲイト方言の例を引用する場合は、もとの表記によらず、本稿での表記に改変して示す。

<sup>5</sup> 以下、本稿にあげる使役文の例の英訳において“make”、“let”、“have”などの動詞が使われるが、これは、話者によって与えられたり、元の資料（テキスト）において使われていたものを示しただけであり、英語においてそれらが含意する違いを必ずしも反映しているわけではない。ハイダ語における意味的な違いについては、3.2で詳述する。

- (4) a. *sgawaay gəw-gən*  
 the.knife be.lost-PAST  
 The knife was missing.
- b. *Tony sgawaay gəw-da-gən*  
 Tony the.knife be.lost-CAUS-PAST
- b'. *sgawaay Tony gəw-da-gən*  
 Tony lost the knife.

他動詞文において A と O の配列順序に二通りあるのは、O となる名詞句が指示するものの有生性が A となる名詞句のそれよりも低い場合である。使役文において、使役者（すなわち A）と被使役者（すなわち O）の配列順序に二通りあるのは、他動詞文において名詞句の有生性が語順に関係するのと全く同じである。

以上は、使役者と被使役者がともに名詞の場合であったが、人称代名詞の場合には、動作者格（他動詞文において A として用いられる）と目的格（他動詞文において O として用いられる）の区別があるので、それらの配列順序も名詞の場合と若干異なる。ハイダ語は、いわゆる分裂自動詞性を示す活格タイプの言語であり、自動詞文の主語となる人称代名詞には、動作者格と目的格のいずれかが現われ得る。それら 2 つの格の区別のある 1 人称単数と複数、2 人称単数が使役者もしくは被使役者として使役文に現われた場合には、それらの配列順序は、二通りあり得る（被使役者が人称代名詞で現われている次例の (5b) と (5b') を参照）。

- (5) a. *dii ηaysdlə-gən*  
 1SG.OBJ be.cured-PAST  
 I was cured.
- b. *Tony dii tlə-ηaysdlə-gən*  
 Tony 1SG.OBJ CAUS-be.cured-PAST
- b'. *dii Tony tlə-ηaysdlə-gən*  
 1SG.OBJ Tony CAUS-be.cured-PAST  
 Tony cured me.

もとの自動詞文（すなわち、(5a)）において、その主語が目的格の 1 人称代名詞 *dii* で現われているのは、動詞 *ηaysdlə* の S が A と同じ動作者格ではなく、O と同じ目的格の人称代名詞をとるからである（詳しくは、Hori 2008 を参照）。その使役文（(5b) と (5b'））においても、被使役者（目的語）となる人称代名詞が目的格のままであることを注意されたい。

一方、2 項動詞の場合についてしてみると、ハイダ語の 2 項動詞は、おおまかにいって、名詞句に文法関係を示す標識がない場合（「NP NP タイプ」とする）と O となる名詞句が後置詞を伴う場合「NP NP=PP タイプ」とする）の 2 つに分かれる。前者のタイプの場合、使役文における使役者と被使役者の関係は、語順で示される。例えば、

- (6) a. *Tony ciinaay dlən-gən*  
 Tony the.fish wash-PAST<sup>6</sup>  
 Tony cleaned the fish.
- b. *Ben Tony ciinaay giŋ-dlən-gən*  
 Ben Tony the.fish CAUS-wash-PAST  
 Ben made Tony clean the fish.

この例が示すように、最も中立的な使役文の語順は、[使役者－被使役者－対象者（もとの目的語）]である（他の使役接辞が付いた場合も同様である<sup>7</sup>）。この例の場合、被使役者（*Tony*）の有生性が対象者（*ciinaay* ‘the fish’）のそれよりも高いので、対象者を被使役者の前におくことも可能である。

2項動詞のもうひとつのタイプ、すなわち、「NP NP=PP タイプ」をみると、例えば、動詞 *dayiy* 「探す」の場合、その対象者を後置詞 =*gi*（本来は、「(場所/受け手) へ」）で示すが、使役文においてもその標識はかわらない（(7a) はもとの文、(7b) は使役文の例である）。

- (7) a. *Ben dawjaay=gi dayiy-gən*  
 Ben the.cat=PP look.for-PAST  
 Ben looked for the cat.
- b. *Ben Tony dawjaay=gi giŋ-dayiy-gən*  
 Ben Tony the.cat=PP CAUS-look.for-PAST  
 Ben made Tony look for the cat.

この場合、もとの文における目的語（*dawjaay* ‘the cat’）が後置詞で示されているので、使役文においては、上に示した語順以外に、もとの目的語（対象者）を使役者の前や被使役者の前におくことも可能である<sup>8</sup>。

2項動詞から派生された使役文に関する統語的な特徴として更にいくつか指摘しておく、まず、(8) のような語順（すなわち、[使役者－被使役者－対象者]）の場合、再帰所有代名詞 *ʔaŋGa* で示される所有者は、被使役者である。

- (8) *Ben Tony ʔaŋGa ciinaay giŋ-dlən-gən*  
 Ben Tony own the.fish CAUS-wash-PAST  
 Ben made Tony clean his (= Tony’s) own fish.

<sup>6</sup> この場合、Aの方がOよりも有生性が高いので、AとOの語順は、ここに示したそれと逆もあり得る。

<sup>7</sup> 但し、*tlə-* は、2項動詞には付かない（3.1.1 参照）。

<sup>8</sup> 語順に関して付言しておく、ここに述べた以外にも、焦点標識 =*uu* の有無によって、更にいくつかの語順が可能となる。十分な調査を経た上での考察ではないが、被使役者は、=*uu* による焦点化はできない（すなわち、文頭に移動させることができない）のに対し、対象者は、無生物の場合のみ、焦点標識を付加することによって文頭に移動させることができるようである。

所有者が使役者 (*Ben*) であることを示すためには、所有句 (*ʔayGa ciinaay*) を使役者の後におく必要がある。すなわち、

- (8') *Ben ʔayGa ciinaay Tony giy-dlən-gən*  
 Ben own the.fish Tony CAUS-wash-PAST  
 Ben made Tony clean his (= Ben's) own fish.

更に、2 項動詞から派生された使役文の統語的特徴として、被使役者は、文脈から明らかでない場合あるいは不定の場合、省略され得る点があげられる。(9) と (10) は、使役接辞として *-da*, (11) は *giy-* が付加された例である。

- (9) *qaaga q'ava-s='uu cinaay=han @ kiGa-da-gəy-gin*  
 uncle old-NONPAST=FOC grandfather=PP be.called-CAUS-HABIT-PAST  
 The old uncle used to call him (=ø) grandpa.

- (10) *quginaay Bill @ qiy-da-gən*  
 the.book Bill see-CAUS-PAST  
 Bill showed people (=ø) the book.

- (11) *hayiy='uu yaac' xaayda=kitgi tl'a=gi nəy kyaagəy-s=gyaan*  
 and.yet iron people=PP 3PL=PP INDF call-NONPAST=when  
*kwaada=ʔad='uu @ tl'ə=giy-sGəw-gən*  
 quarter=PP=FOC 3PL=CAUS-pay-PAST  
 When someone called them in English, they made that person (=ø) pay a quarter.

例えば、(10) のように、標識を伴わない名詞句が 2 つ現われている場合は、それぞれの名詞句は、対象者と使役者であり、被使役者が省略されているという解釈しかない<sup>9</sup> (Kozinsky and Polinsky 1993: 228 参照)。

この被使役者の省略は、1 項動詞を基底とする使役文でも可能である。

- (12) *χagu=gi tl'ə=χaw-s=gyaan @ tl'ə=k'a-Ga-da-gən*  
 halibut=PP 3PL=fish-NONPAST=when 3PL=dry-become-CAUS-PAST  
 When they got halibut, they dried it (= halibut).

Enrico (2003: 1117) によれば、被使役者の省略は、補語や付加詞がある場合にのみ可能であり、それらが無い場合は、被使役者を省略することができない。上にあげた例において、(9) ~ (11) はそれぞれ補語として使役者以外に (9) *cinaay=han* (grandfather=PP), (10) *quginaay* 'the book', (11) *kwaada=ʔad* (quarter=PP) があり、また、(12) は従属節 ('when they ~') があ

<sup>9</sup> この場合は、現われている名詞句のうち、一方が人間で、一方が無生物であるために、*quginaay* 'the book' と *Bill* の語順は逆でも可能である。

るために、それらの文における被使役者の省略が可能であると考えられる<sup>10</sup>。

しかし、(13) に示すように、2 項動詞 *k'udlən* 'paint' に自動詞化接頭辞 *ta-* が付いて 1 項動詞になったものに使役接辞が付いた場合、補語や付加詞などがなくても被使役者が省略されることがあり得る (b は、*k'udlən* 'paint' が 2 項動詞であることを示す)。

- (13) a. *∅ 'la ta-k'udlən-da-gən*  
3 INTRAN-paint-CAUS-PAST  
He had some painting done.<sup>11</sup>
- b. *Ben naagaay k'udlən-gən*  
Ben the.house paint-PAST  
Ben painted the house.

以上みてきたことをまとめると、ハイダ語における使役に共通する特徴として、次の点が指摘できるであろう。

- 1) 使役者、被使役者、対象者は、語順により決まる。但し、対象者に標識がある場合は、対象者と他の二者との配列順序は、比較的自由である。また、格の区別がある 1 人称単数と複数、2 人称単数の人稱代名詞が使役者、被使役者、対象者のいずれかに現われる場合も、配列順序が自由となることがあり得る。
- 2) 2 項動詞から派生した使役動詞の対象者が再帰所有代名詞を伴う場合、最も中立的な語順においては、その所有者は、被使役者である。
- 3) 2 項動詞から派生した使役動詞の場合、被使役者を省略することが可能である。言い換えれば、そのような節において、名詞句が 2 つしか現われていない場合は、それぞれ使役者と対象者でしかない。

### 3. 使役接辞の機能的な違い

上に述べたように、ハイダ語には、*tlə-*, *giy-*, *-da* の三種類の使役接辞が認められる。しかし、それら三者の間には、いくつかの点において差異が認められる。本節では、形態統語的な面と意味的な面に分けて、それらの差異について明らかにする。

#### 3.1 形態統語的な面

ここでは、三種類の使役接辞に関わる形態統語的な側面として、それらをとる動詞の結合価、三者間の共起可能性、使役者・被使役者の有生性を取り上げる。

##### 3.1.1 動詞の結合価

*tlə-*, *giy-*, *-da* の使役接辞が付く動詞の結合価についてみると、1 項動詞の場合は、い

<sup>10</sup> これらの句や節が省略された場合の容認度については、確認していない。

<sup>11</sup> Enrico (2003: 1118) による、マセット方言 (北部方言のひとつ。カナダのクイーン・シャーロット諸島北部で話される) の例をスキドゲイト方言の話者に確かめたものである。しかし、マセット方言においては、この種の文における被使役者の省略の容認度は話者によって異なるようである。

ずれの接辞も付加され得る（1 項動詞に付く場合の、他の制約や意味的な違いについては、以下に述べる）。下にあげるのは、(14) が *giŋ-*、(15) が *tlə-*、(16) が *-da* の例である（それぞれ a が基底の動詞の場合、b が使役接辞の付いた場合を示す）。

- (14) a. *daGaɬ=’uu Ben k’ajuu-gən*  
 yesterday=FOC Ben sing-PAST  
 Ben sang yesterday.
- b. *daGaɬ=’uu Tony Ben giŋ-k’ajuu-gən*  
 yesterday=FOC Tony Ben CAUS-sing-PAST  
 Tony let Ben sing yesterday.
- (15) a. *səŋGaay=’uu tə=skinχa-gən*  
 morning=FOC 1SG.AG=wake.up-PAST  
 I woke up in the morning.
- b. *səŋGaay=’uu dii ʔawGa dii tlə-skinχa-gən*  
 morning=FOC my mother 1SG.OBJ CAUS-wake.up-PAST  
 My mother woke me up in the morning.
- (16) a. *ciinaay taŋGa-gən*  
 the.fish be.salty-PAST  
 The fish were salty.
- b. *Japanese guy=’uu ciinaay taŋGa-da-gən*  
 Japanese guy=FOC the.fish be.salty-CAUS-PAST  
 The Japanese guy salted the fish.

一方、2 項動詞にこれら三種の使役接辞が付加され得るかどうかをみると、制約がほとんどないものからかなりあるものまで、三者間において差異が認められる。接頭辞 *giŋ-* は、意味的な制約がなければ（3.2 参照）、如何なる 2 項動詞にも付加され得る。例えば（上と同様、a が基底の動詞、b が使役の例である）、

- (17) a. *Ben naagaay k’udlən-gən*  
 Ben the.house paint-PAST  
 Ben painted the house. (=13b)
- b. *Ben Tony naagaay giŋ-k’udlən-gən*  
 Ben Tony the.house CAUS-paint-PAST  
 Ben made Tony paint the house.
- (18) a. *daGaɬ=’uu Ben Tony qaqaŋ-gən*  
 yesterday=FOC Ben Tony meet-PAST  
 Ben met Tony yesterday.

b. *daGaʔ=ʼuu Tom Ben Tony giŋ-qaqan-gən*  
 yesterday=FOC Tom Ben Tony CAUS-meet-PAST  
 Tom made Ben meet Tony yesterday.

(19) a. *dii=Ga ʼlaa guysuu-gən*  
 1SG.OBJ=PP 3 quarrel-PAST  
 He quarreled with me.

b. *gyaan=ʼuu gud=Ga ʼlaa ʼla giŋ-guysuu-gwaa-s*  
 then=FOC RECIP=PP 3 3 CAUS-quarrel-PL[EVD]-NONPAST  
 Then he made them quarrel with each other. (Swanton 1900-1 [Enrico 1995: 30])

(19) では、基底の動詞の目的語が後置詞の =*ga* で示されており、(17) や (18) のように目的語が無標の場合と同様、使役接辞に *giŋ-* を用いることができる。

一方、他の二者、すなわち、*tlə-* と *-da* は、すべての 2 項動詞に付き得るというわけではなく、特に手段接頭辞のひとつである *tlə-* は、2 項動詞には付かない。例えば、

(20) a. *Ben ciinaay taa-gən*  
 Ben the.fish eat-PAST  
 b. *\*Tony Ben ciinaay tlə-taa-gən*  
 Tony Ben the.fish CAUS-eat-PAST  
 (Tony made Ben eat the fish.)

(21) a. *Tony ciinaay dlən-gən*  
 Tony the.fish wash-PAST  
 Tony cleaned the fish. (=6a)  
 b. *\*Ben Tony ciinaay tlə-dlən-gən*  
 Ben Tony the.fish CAUS-wash-PAST  
 (Ben made Tony clean the fish.)

(20) と (21) の動詞 *taa* ‘eat’ と *dlən* ‘wash’ は、目的語として無標の名詞(いずれも *ciinaay* ‘the fish’) をとる 2 項動詞であり、この場合、*tlə-* は付加されず、使役の接辞には、*giŋ-* もしくは *-da* が用いられる(但し、*-da* の容認度は *giŋ-* よりも若干低く、話者によっては、不可と判断されることもある。後述参照)。

この *tlə-* が 2 項動詞に付加されないのは、この接辞が本来的に手段接頭辞であることと関係があると考えられる。すなわち、手段接頭辞は、1 項動詞にも 2 項動詞にも付加されるが、1 項動詞に付加された場合は、その動詞の結合価をひとつ増やして 2 項動詞を派生するのに対し、2 項動詞の場合は、手段接頭辞が付加されても、動詞の結合価を変えない(詳しくは堀 2011 参照)。従って、*tlə-* がたとえ付加されたとしても、動詞の結合価を増やして、使役者となる名詞項を新たにとることができないので、使役の機能が果たせないと考えられる。つまり、その意味では、この *tlə-* は、他の接辞に比べて、純然たる使役の

機能を十分獲得していないとみることができるであろう<sup>12</sup>。

もうひとつの使役接辞 *-da* についてみると、2 項動詞への付加は、*tlə-* ほど制約が強くない。但し、許容されるかどうかは話者によって区々であり、*-da* が付加される動詞は限られているとみられる。

(22) a. *t'aləŋ sɔlaagul daGa-gən*

1PL.AG spoon have-PAST

We had a spoon.

b. *ʔiitl'ə GuŋGa ʔiitl'ə sɔlaagul daGa-da-gən*

our father 1PL.OBJ spoon have-CAUS-PAST

Our father let us have a spoon.

(23) a. *Gudaay 'laa daw-gən*

the.box 3 get-PAST

He got the box.

b. *Guda 'laa 'la daw-da=gyaan...*

box 3 3 get-CAUS=when

He made him get a box and ....

c. *gyaan gina ʔaadasii 'laa 'la daw-Gwaah-da-s=gyaan....*

then INDF different 3 3 get-outward-CAUS-NONPAST=when

And then when he sent him to get something else, .... (Swanton 1905: 55)

(24) a. *'laa 'la qyaanGa-gən*

3 3 see[outward]-PAST

He went to see her.

b. *'lə=qaaga dawGana-s jaaga ø 'lə=qyaanGa-daaya-gən ...*

3=uncle young-NONPAST wife 3=see[outward]-CAUS[EVD]-PAST

His youngest uncle's wife had them (= ø) go to look at them, ... (Swanton 1905: 61)

しかし、*-da* が 2 項動詞に付くのは、下にあげるように、ほぼ語彙化している、言い換えれば、*giŋ-* に置き換えられないか (例えば、下の (25) (26))、置き換えられるとしても特別な文脈が必要とされる場合に限られている (例えば、下の (28c))。

(25) a. *ʔaan Gaŋa ʔaayda kil sq'adGa-di-ga*

here child Haida language learn-DUR-NONPAST

Kids here are learning the Haida language.<sup>13</sup>

<sup>12</sup> 尤も、1 項動詞にしか適用されない使役接辞は、他の言語においてもみられる (Comrie 1989 参照)。

<sup>13</sup> 更に、NP=*sda* 'from NP' を加えることができる。

- b. *George ʔaan ɠaxa ɠaayda kil sq'adɠa-da-gən*  
 George here child Haida language learn-CAUS-PAST  
 George taught the Haida language to kids here.
- c. \**George ʔaan ɠaxa ɠaayda kil ɠiy-sq'adɠa-gən*
- (26) a. *daalə Tom silda-gən*  
 money Tom borrow-PAST  
 Tom borrowed money.<sup>14</sup>
- b. *daalə Tom Ben silda-da-gən*  
 money Tom Ben borrow-CAUS-PAST  
 Tom loaned Ben money.
- c. \**daalə Tom Ben ɠiy-silda-gən*
- (27) a. *nəy ɠaxa k'ajuu-s tl'an-di-ga*  
 INDF child small-NONPAST suckle-DUR-NONPAST  
 The baby is suckling.
- b. *gidɠəy 'laa tl'an-da-di-ga*  
 own.child 3 suckle-CAUS-DUR-NONPAST  
 She is suckling her child.
- (28) a. *dii 'laa qiy-gən*  
 1SG.OBJ 3 see-PAST  
 He saw me.
- b. *dii 'laa quginaay qiy-da-gən*  
 1SG.OBJ 3 the.book see-CAUS-PAST  
 He showed me the book.
- c. <sup>(?)</sup> *dii 'laa quginaay ɠiy-qiy-gən*  
 1SG.OBJ 3 the.book CAUS-see-PAST  
 He made me look at the book.
- (29) a. *'laa=gi t'aləy suu-gən*  
 3=PP 1PL.AG say-PAST<sup>15</sup>  
 We said to him.
- b. *ɠəm yah-gaay dii=gi 'laa suu-da-gəy*  
 NEG truth-DEF 1SG.OBJ=PP 3 say-CAUS-NEG  
 He did not tell me the truth.

Nedyalkov and Silnitsky (1973: 16) は、他動詞に使役接辞が付いて 3 項動詞を派生するのがあまり生産的でない場合においても、「抽象的な行為」「食物の摂取」を表わす他動詞であれば、使役動詞を派生することが多いとして、多くの言語からそのような例（例えば、「抽象

<sup>14</sup> 更に、NP=*ʔad* ‘from NP’ を加えることができる。

<sup>15</sup> 動詞 *suu* ‘say’ は、2 つとる名詞句のうち、ひとつは、後置詞 =*gi* を要求する。

的な行為」として‘see – show’, ‘remember – remind’, ‘understand – explain’, 「食物の摂取」として ‘drink – give to drink’, ‘eat’ – ‘feed’, ‘suck – suckle’) をあげている。更にいえば, 上に示した (25) から (29) では, 使役者が被使役者に働きかけてその行為をさせるという使役性は低く, 接尾辞 *-da* は, 動詞がとり得る名詞項の数をひとつ増やすという機能しか担っていないと考えられる。

以上, これら三種の使役接辞と動詞の結合価の関係について次のようにまとめられよう。

- 1) 基底の動詞が 1 項動詞の場合は, いずれの使役接辞も, 意味的な制約がなければ, 付加され得る。
- 2) 基底の動詞が 2 項動詞の場合は, *giŋ-* > *-da* > *tlə-* の順で制約が強くなり, *tlə-* に至っては, 本来の手段接頭辞としての性質が影響している故か, 2 項動詞に付加されることがない。

### 3.1.2 使役接辞同士の共起の可能性

前節で述べたように, 基底の動詞の結合価によりこれら三種の使役接辞に制約上の差異が認められるということは, それらの間の機能的差異を示すことでもある。機能的な差異があるということは, 言い換えれば, それら三種の使役接辞が共起する (すなわちひとつの動詞に付加される) 可能性があるということである。実際, これらの使役接辞のうち, *giŋ-* は, *tlə-* や *-da* と共起することができる。

- (30) a. *machine-gaay 'laa 'la giŋ-tlə-qa-a-gəŋ*  
 machine-DEF 3 3 CAUS-CAUS-go-PAST  
 He made him operate the machine.
- b. *k'aawaay 'laa 'la giŋ-hayluu-da-daxida-gəŋ*  
 the.herring.roe 3 3 CAUS-disappear-CAUS-right.away-PAST  
 He made him finish the herring roes right away.

(30a) は *giŋ-* と *tlə-*, (30b) は *giŋ-* と *-da* がそれぞれ 1 項動詞に付加されて共起することを示す。それぞれにおいて, まず, [*tlə-V*] (*tlə-qa-a* ‘make NP go’ > ‘operate’) あるいは [*V-da*] (*hayluu-da* ‘make NP disappear’ > ‘finish’) という一次的な使役動詞が派生され, 更に, *giŋ-* を付加することによって, 二次的な使役動詞が派生されたと解釈することができる。この事実, また, 3.1.1 で指摘したように *giŋ-* が基底の動詞の結合価に関わりなく付加されるということから, *giŋ-* は, 二次的な使役を派生するのに対して, 基底の動詞の結合価に制約が認められる *tlə-* と *-da* は一次的な使役を派生すると考えられ, 更に, その違いは, 3.2 で述べる意味的な違いにも反映されるとみることができるであろう。

こうしてみれば, *tlə-* は, そもそも 2 項動詞に付加されることがないので, 1 項動詞に *-da* が付加されてできた一次的な使役動詞に, 使役接辞としての *tlə-* が付くことはない, すなわち, ひとつの動詞に *tlə-* と *-da* が共起することはないと考えられる。しかし, *tlə-* が本来の手段接頭辞としての意味「手で」を表わす場合は, *tlə-* と *-da* がひとつの動詞に共起することがある。例えば,

(31) a. *gyaaʔadaay 'laa t'adʔgulgən-ii*

the.blanket 3 put.over.shoulders[PAST]-INFO

He put the blanket over his shoulders. (Enrico 2005: 777)

b. *gidGay 'laa 'laa tɬ-t'adʔguut-daayaay ʔwan suu-ga*

own.child 3 3 INSTR-put.over.shoulders-CAUS[COMP] 3PL say-NONPAST

They say that she put it around her son's shoulders. (Swanton 1901 [Enrico 1995: 36])

基底の動詞が用いられた (31a) をみれば、この動詞が *gyaaʔadaay* ‘blanket’ と *'laa* (3 人称代名詞) の 2 つの名詞項をとることが分かる。一方、(31b) では、この 2 項動詞に *tɬ-* と *-da* (この例では、補文標識の接辞が付いて *-daayaay* となっている) が付いているので全体として 4 項動詞になることが予測されるが、実際に現われている名詞項は、*gidGay* ‘(her own) child’ と 2 つの 3 人称代名詞 *'laa* (ひとつは「それ」<sup>16</sup>と他方は「彼女」) の 3 つである。この例において、動詞の結合価を増やしているのは接尾辞の *-da* の方であり、*tɬ-* は、本来の手段接頭辞「手で」という意味を表わす、すなわち、その行為の手段を表わすだけで、動詞の結合価には与っていないと解釈するのが妥当であろう (実際、2 項動詞に手段接頭辞が付加されても、動詞の結合価をかえることはない [堀 2011 参照])<sup>17</sup>。従って、この例は、使役接辞が 2 つ付いたものであるとは考えない<sup>18</sup>。実際、このようにひとつの動詞に *tɬ-* と *-da* が共起するのは、管見では、この一例だけである。

以上みてきたのは、三者間の共起性であったが、これら三種の使役接辞のうち、*tɬ-* を除く他の二者は、同じ動詞に繰り返して付加することができるようである。例えば、(32) では、*giŋ-* が 1 項動詞に重ねて付加され、全体として 3 項動詞が派生されている。

(32) *'laa 'laa hl=giŋ-giŋ-qaayd-an*

3 3 1SG.AG=CAUS-CAUS-leave-PAST

I made her make him leave. (Enrico 2003: 1151)<sup>19</sup>

スキドゲイト方言の話者によれば、(32) は、容認度が若干下がり、*giŋ-* を重ねるよりも、むしろ別の接尾辞 *-χat* を使う方が自然であるという。すなわち、

(32') *'laa 'la tɬ=giŋ-qaayd-χalgən*

3 3 1SG.AG=CAUS-leave-tell[PAST]

I told her to make him leave.

<sup>16</sup> 文脈から「ラッコの毛皮」と考えられる。

<sup>17</sup> この解釈が妥当かどうか、話者にはまだ確かめていない。

<sup>18</sup> グロスにおいて、*tɬ-* に対して INSTR としたのはそのためである。

<sup>19</sup> (32) と (33b) は、マセット方言の例であるため、表記は、Enrico (2003) のままとした (*hl*: 無声側面摩擦音, *ng*: 軟口蓋鼻音, *x*: 口蓋垂無声摩擦音, *r*: 咽頭化声門閉鎖音, *ʔ*: 声門閉鎖音, *.*: 音声的に実現しない子音)。

また、次例が示すように、*-da* を重ねて使うこともできるようである（いずれも話者には確認していない）。

- (33) a. *nəy st'iga-s=gaduu 'la gid-siy-s*  
 INDF sickly-NONPAST=around 3 perform.as.a.shaman-try-NONPAST  
*naanəy 'la suu-da-Ga-daaya-gən*  
 own.grandmother 3 say-CAUS-outward-CAUS[EVD]-PAST  
 He sent over his grandmother to say that he would try to perform as a shaman around the sickly person. (Swanton 1905: 63)
- b. *Bill Mary gidaang xang qalgee=rahl 7aa naan-da-gan*  
 Bill Mary own.child glasses=with own play-CAUS+CAUS-PAST  
 Bill let Mary let her child play with his glasses. (Enrico 2003: 1111)

(33a) は、2 項動詞 *suu* に *-da* が付いて 3 項動詞となったことによって、メッセージ（‘he would try to ~’）が加わり（但し、そのメッセージの受け手は示されていない）、更に、それに *-da*（この例では、後続の接尾辞によって *-daaya* となっている）が付いて、*naanəy* ‘his own grandmother’ を名詞項としてとっていると解釈できる。一方、(33b) は、「遊ぶ」という 1 項動詞に *-da* が 2 つ付いて、結果的に、‘Bill’, ‘Mary’, *gidaang* ‘Mary’s child’ を項とする 3 項動詞となっている（但し、Enrico の解釈に従えば、重音脱落によって *-da* がひとつ脱落している）。

以上、三種の使役接辞の共起可能性についてまとめれば、次のようになる。

- 1) *giy-* は他の 2 つの使役接辞と比較的自由に共起し得る。
- 2) *tlə-* と *-da* は、共起しにくい。
- 3) *giy-* と *-da* は、重複して用いられることがあるが、その容認度に関しては、話者による違いが認められる可能性がある（この点については、より詳しく調べる必要がある）。

### 3.1.3 使役者・被使役者の有生性

*giy-*, *tlə-*, *-da* が用いられる使役文における使役者の有生性についてみると、使役者が有生物（更にいえば人間）の場合は、いずれの接辞も可能であるが、無生物の場合は、前二者の接頭辞だけが許容される。(34) は、*giy-* が用いられた例である。

- (34) a. *χaw k'iina-s dii giy-dayəlgən*  
 tea hot-NONPAST 1SG.OBJ CAUS-sweat[PAST]  
 The hot tea made me sweat.
- b. *'laa=gi 'lə=sdətə-gwaalgaay 'lə=giy-hinguga-s*  
 3=PP 3=need-badly[NOM] 3=CAUS-shiver-NONPAST  
 His desire for her made him shake. (Swanton 1900-1 [Enrico 2005: 968])

(34b) では、動詞から派生した名詞句 ‘his desire for her’ が使役者として現われている。この (34) における基底の動詞 *daŋət* ‘sweat’, *hinguga* ‘shiver’ は、1 人称単数代名詞が主語の時、他動詞の目的語と同じ目的格の *dii* をとるものであり、言い換えれば、これらの動詞が表わすのは、その主語が引き起こし得る動作や出来事でもなければ、制御し得る動作や出来事でもない (Hori 2008 で [-agency] [-control] とする動詞である<sup>20</sup>)。 *giy-* による使役文で、使役者が無生物であることが可能なのは、この種の動詞に限られるとみられる。

尚、話者によっては、このような無生物を使役者とする使役文ではなく、(35) のように、複文による表現を好むこともある<sup>21</sup>。

(35) *χaw-ʔin-gən=gii='uu dii Gaχa-gilgən*  
 fish-outward-PAST=PP=FOC 1SG.OBJ weak-become[PAST]  
 The fishing made me tired. (*lit.* (I) went out fishing, so I got tired.)

使役接辞として *tlə-* が用いられている (36) では、使役者と被使役者がともに無生物である (これらの例における *giy-* と *tlə-* の交換可能性については、話者に確かめていない)。

(36) *'lə=ʔguxu='uu ʔəniis st'iigaay tlə-Gaχa-gyaala-gən*  
 3=lungs=FOC this the.sickness CAUS-weak-become[EVD]-PAST  
 The sickness weakened his lungs.

本来、手段接頭辞の *tlə-* が動詞に付加されて「手で」の意味で用いられる場合、その文の行為者 (主語) は、有生物であるのが一般的である。従って、(36) のように、無生物が使役者となる文において *tlə-* が用いられているということは、もとの「手で」という手段接頭辞の意味が失われ、専ら動詞の項を増やす使役の接辞へと機能を拡張させたことを示すものと解釈できる<sup>22</sup>。

一方、被使役者の有生性についてみると、*giy-* の付加によって派生された使役文は、無生物の被使役者をとることができない。例えば、(37) では、*-da* と *tlə-* は許容されるが<sup>23</sup>、*giy-* を用いると不可と判断される。

<sup>20</sup> Enrico (2003) は、[volitional] という意味特徴を欠く動詞と記述している。ここに *giy-* が用いられる例として示した動詞は、確かに意志性がないものと考えられ、その点においては、意志性と同義と考えてもよいが、より客観的に記述できるという理由から、ここでは、[agency] と [control] という2つの意味特徴を用いる (詳しくは、Hori 2008, また Mithun 1991 を参照)。

<sup>21</sup> Swanton (1900-1 [Enrico 1995], 1905) において無生物を使役者とする用例が散見されることから、無生物の使役者を用いるのは、必ずしも英語の影響によるものではないと考えられる。

<sup>22</sup> その一方で、付加される動詞の結合価に制約がある点において十全な使役接辞になり得ていないことを 3.1.1 で指摘した。尚、「手で」を表わす手段接辞が使役接辞へと一般化する過程は、この種の接辞をもつ言語において多くみられる (Mithun 1999 参照)。

<sup>23</sup> 但し、*tlə-* の許容度は、*-da* よりも下がる。

- (37) a. *Tony sgawaay gəw-da-gən*  
 Tony the.knife be.lost-CAUS-PAST  
 Tony lost the knife.
- b. \**Tony sgawaay giŋ-gəw-gən*  
 Tony the.knife CAUS-be.lost-PAST

他の二種の使役接辞から派生された使役文は、無生物の被使役者をとることができる。次にあげるのは、無生物の被使役者の例 ((38) は *tlə-*, (39) は *-da*) である (被使役者に二重下線を付す)。

- (38) a. *qalqaay 'laa tlə-sgəw-gən*  
 the.ice 3 CAUS-melt-PAST  
 He melted the ice.
- b. *qə ta-gaay 'laa tlə-dagəŋa-gən*  
 food-DEF 3 CAUS-bad-PAST  
 He spoiled the food.
- c. *qajin='uu tə=tlə-higa-di-ga*  
 own.hair=FOC 1SG.AG=CAUS-straight-DUR-NONPAST  
 I am straightening my hair.
- d. *gina ʔun=gu tl'aa qə taa-s 'laa tlə-skunxa-di-ga*  
 INDF top=on 3PL INDF eat-NONPAST 3 CAUS-clean-DUR-NONPAST  
 He is cleaning the table (= something on which they eat something).
- (39) a. *k'idqigaay ʔaŋga taa sq'iila-giit-da-gən*  
 the.dress own 1SG.AG dirty-become-CAUS-PAST  
 I got my dress dirty.
- b. *gudaay 'la c'is-guy-da-gən*  
 the.box 3 CL-fall-CAUS-PAST  
 He dropped the box.
- c. *gaay=sda='uu 'lə=naanɡa dii=gi quɡin xanjuu-da*  
 that=from=FOC 3=grandmother 1SG.OBJ=to paper travel-CAUS  
 After that her grandmother sent me a letter.

有生物の被使役者は、これら三種の接辞によって派生された使役文において現われることができる。(40) は、*giŋ-*を用いた例である。

- (40) a. *naagaay=ga dii gidga 'laa giŋ-sdilgən*  
 the.house=toward my child 3 CAUS-return[PAST]  
 He made my child to return to the house.

b. gidgaŋ tə=**giŋ**-qaa-gən  
own.child 1SG.AG=CAUS-walk-PAST

I made my child walk.

c. Bill Tom **giŋ**-xyalgən  
Bill Tom CAUS-dance[PAST]

Bill made Tom dance.

(40) あるいはこれまでにあげた *giŋ-* を用いた例から指摘できることは、使役者・被使役者がともに有生物の場合、動詞は、[agency] [control] という意味特徴を有する、すなわち、行為者がその動作の起こし手となり、制御することが可能な動作を表わすものに限られるという点である<sup>24</sup> (無生物が使役者である場合 (34) と比べられたい)。

*-da* も有生物の被使役者の使役文でも用いられるが、*giŋ-* のような動詞の意味特徴による制約はない。例えば、(41a, b) のように [agency] [control] を有する動詞であっても、あるいは、(41c, d) のようにそれらの意味特徴を欠く動詞であっても、*-da* による使役文は可能である。

(41) a. ʔiitl'ə xaadGa Vancouver=*Ga* 'laa xid-**sga-daaya-gən**  
our father Vancouver=toward 3 fly-away-CAUS[EVD]-PAST

He sent our father to Vancouver by plane.

b. *cannery-gaay=Ga* ʔiitl'ə tl'ə=**χanjuu-da-gən**  
cannery-DEF=toward 1PL.OBJ 3PL=travel-CAUS-PAST

They sent us to the cannery.

c. ʔiitl'ə daaGa da *χaynaŋaa-daayəs=dləw ...*  
our older.brother 2SG.AG alive-CAUS[NONPAST]=if

If you kept our older brother alive, ...

d. *χaayda=t'algi='uu* dəŋ tə=**dlaaga-da**, *kilslaay*  
human=over=FOC 2SG.OBJ 1SG.AG=tall-CAUS sir

I will make you taller than an average person, sir.

*tlə-* による使役文においても、有生物の被使役者は可能である<sup>25</sup>。例えば、

(42) a. 'laa tə=**tlə-tGwaaxa-git-t'ajij**  
3 1SG.AG=CAUS-be.scared-become-try

I tried to scare him.

<sup>24</sup> 但し、使役文で用いられた場合、被使役者が実際にその動作を遂行するかどうかも含意するとは限らない (3.2 参照)。

<sup>25</sup> Enrico (2005: 662) は、*tlə-* による使役文では、無生物の被使役者のみが可能であるとしているが、実際には、(42) に示すように、Swanton (1905) にも有生物の被使役者の例がみられる。

- b. *gəm ʔəsəŋ tɔgu=χan dii nəŋ tɔ-daagəŋgad-təŋaa-ga*  
 NEG too how=EMPH 1SG.OBJ INDF CAUS-bad-can-NONPAST  
 Nobody can spoil me any more.
- c. *tləw sdiŋ=q'idGa='uu 'laa tl'ə=tlə-q'iiχaaya-gən*  
 boat two=between=FOC 3 3PL=CAUS-be.stuck[EVD]-PAST  
 They trapped him between two boats.
- d. *dii 'laa tɔ-χatə-gən*  
 1SG.OBJ 3 CAUS-be.surprised-PAST  
 He surprised me.
- e. *'laa=tl'a 'la tɔ-skinχaaya-gən*  
 3=but 3 CAUS-wake[EVD]-PAST  
 But he woke him up. (Swanton 1905: 65)

*tlə-* による使役文の被使役者は、意味的に経験者 *experiencer* であり、基底の動詞も [agency] を欠き、[control] は随意的（仮に [±control] と表わす）の意味特徴を欠くものが多い<sup>26</sup>。但し、それらの意味特徴を有するものであっても、使役接辞に *tlə-* が用いられることもある。

- (43) *'laa tɔ=tlə-q'əw-ʔu-gən*  
 3 1SG.AG=CAUS-sit-SG-PAST  
 I seated him.

この (43) のような場合は、*-da* を使うことも可能である（意味的な違いについては、3.2 を参照）。

以上、使役者・被使役者の有生性と基底の動詞の意味特徴の観点から、*giŋ-*, *tlə-*, *-da* の三種の接辞の差異について述べてきたことをまとめると、次のようになる。

- 1) *giŋ-* は、使役者の有生性については問わないが、無生物が使役者となる場合は、被使役者は有生物でなくてはならず、また、基底の動詞も [agency] [control] の特徴を欠くものでなくてはならない。対して、使役者と被使役者ともに有生物である場合には、基底の動詞は [agency] [control] の特徴を有するものに限られる。
- 2) *tlə-* は使役者・被使役者の有生性については問わないが、被使役者が有生物である場合には、基底の動詞は [agency] [control] の両方あるいは [agency] を欠くものに限られる（すなわち、[-agency] [±control]）。
- 3) *-da* は、使役者が有生物でなければならないが、被使役者は、有生物と無生物の両方が可能である。また、基底の動詞の意味特徴についても、前二者のような制約はない。

<sup>26</sup> しかし、*skinχa* 'wake' は、1人称代名詞が主語として現われる場合、他動詞主語と同じ動作者格 *agentive* を要求する動詞である（但し、[agency] という特徴を欠く）。(42) の他の4例の動詞は、すべて目的格を要求する動詞である（すなわち、[agency] [control] の両方を欠く）。

### 3.2 意味的な面

本節では、三種の使役接辞が用いられた使役文にみられる意味的な違いについて述べる。これまでの議論をまとめると、三者間で対立をみせると考えられる組み合わせは、次の通りである。

[1] 基底が1項動詞の場合

- a. 使役者・被使役者ともに有生物 (*giŋ-*, *tlə-*, *-da* いずれも可能)
- b. 使役者が有生物, 被使役者が無生物 (*tlə-* と *-da* のみ可能)

[2] 基底が2項動詞の場合: *giŋ-* と *-da* のみ可能

上に述べたように, [1a] の場合において, *tlə-* が用いられるのは, 主に被使役者(基底の動詞の主語)が経験者であることが多いので, その点において, 他の *giŋ-* と *-da* とは区別されよう。後二者のうち, *giŋ-* は, 3.1.2 で述べたように, *-da* と共起することができる, 言い換えれば, *-da* によって派生された一次的な使役動詞を更に使役化するという点で, 二次的な使役を派生し得る。この形態的な振る舞いからみるならば, *-da* は直接使役, 一方の *giŋ-* は間接使役を表わすと考えられる。例えば, (44) において, *-da* を用いた a の方が不可に近い(か不可)と判断されるのは, *-da* が直接的に被使役者に働きかけ, かつ, 被使役者がその行為を行なうことを表わすからであり, 対して, *giŋ-* を用いた b の方が適切であるとされるのは, 被使役者がその行為を行なうことを必ずしも含意しないからであると解釈できる<sup>27</sup>。

- (44) a. ?*Tony Jane xyaat-da-gən=sk'yaaxan='uu gəm 'laa xyaat-gəŋ-gən*  
 Tony Jane dance-CAUS-PAST=but=FOC NEG 3 dance-NEG-PAST
- b. *Tony Jane giŋ-xyalgən=sk'yaaxan='uu gəm 'laa xyaat-gəŋ-gən*  
 Tony Jane CAUS-dance[PAST]=but=FOC NEG 3 dance-NEG-PAST  
 Tony made Jane to dance, but she did not dance.

この関連で更に (45) をみてみると, 使役者が人間で被使役者が動物の場合, 用いられる使役接辞は *-da* のみであり, *giŋ-* を用いると許容されない。

- (45) a. *xaagaay ɬa stawjuu-da-gən*  
 the.dog 1SG.AG stroll-CAUS-PAST  
 I walked the dog.
- b. \**xaagaay ɬa giŋ-stawjuu-gən*  
 the.dog 1SG.AG CAUS-stroll- PAST

<sup>27</sup> 但し, 判断は話者によって違いがあり, *giŋ-* であっても不可とする話者がいる。そのように判断する話者は, 別の接辞 *-xat* を用いた場合のみを文法的に適っていると認める。すなわち,

*Tony Jane xyaat-xalgən=sk'yaaxan='uu gəm 'laa xyaat-gəŋ-gən*  
 Tony Jane dance-tell[PAST]=but=FOC NEG 3 dance-NEG-PAST  
 Tony told Jane to dance but she did not dance.

この文は, 他の話者によっても許容される。

この例においては、「犬が歩く」には、人間による強制が必要であり、犬にその行為を起こすように促すのは難しいので、*giŋ-* を用いた場合に不可と判断されると解釈できよう<sup>28</sup>。

しかし、テキスト (Swanton 1900-1 [Enrico 1995], 1905) をみてみると、間接使役と解釈できそうな場合でも、*giŋ-* ではなく、*-da* が現われることが多いようである。下に、Swanton (1900-1 [Enrico 1995]) から、そのいくつかの例をあげる。

- (46) a. *gyaan='uu q'adaŋ 'laa tl'ə=qaayd-daayaŋ ?wan suu-ga*  
 then=FOC with.themselves 3 3PL=leave-CAUS[COMP] 3PL say-NONPAST  
 Then they had him leave with themselves, they say. (Swanton 1900-1 [Enrico 1995: 22])
- b. ... *'laa 'laa qa-c'i-da-sgyaŋ ?wan suu-ga*  
 3 3 come-into-CAUS-almost[COMP] 3PL say-NONPAST  
 ... they say he almost let him in. (Swanton 1900-1 [Enrico 1995: 48])
- c. *gyaan='uu 'laa tl'ə=naay-da-s*  
 then=FOC 3 3PL=play-CAUS-NONPAST  
 Then they let him play. (Swanton 1900-1 [Enrico 1995: 60])

文脈にもよるであろうが、これらは、*giŋ-* に置き換えることができるものと考えられる<sup>29</sup>。

尚、(43) あるいは、次例の (47) のように、*tlə-* による使役文の場合は、もとの手段接頭辞としての意味が保持され、話者の内省によれば、「無理に」といった含意がある。

- (47) *'laa tlə=tlə-tay-gəŋ*  
 3 1SG.AG=CAUS-lie-PAST  
 I put him to bed.

上にあげた [1b] の場合、すなわち、使役者が有生物で被使役者が無生物の使役文がつくれるのは、*tlə-* と *-da* の二種だけである。これらは、次例のように、ほぼ同義で使われる。

- (48) a. *stlaaŋ 'la sq'iila-giit-da-gəŋ*  
 own.hand 3 dirty-become-CAUS-PAST
- b. *stlaaŋ 'la tlə-sq'iila-gilgəŋ*  
 own.hand 3 CAUS-dirty-become[PAST]  
 He got his hands dirty.
- (49) a. *gandlə tlə=qaŋ-da-gəŋ*  
 water 1SG.AG=freeze-CAUS-PAST

<sup>28</sup> 話者の内省によれば、(45b) の文は、“I asked the dog to walk” の意味になるので不可であるという。使役者と被使役者の有生性の序列（すなわち、人間・動物・無生物）がここでも関与していると考えられる（有生性の序列が語順において顕現することは、不十分であるけれども、2節で言及した）。

<sup>29</sup> 尤も、この点は話者に確認する必要がある。

- b. *Gandlə tə=tlə-qalgən*  
 water 1SG.AG= CAUS-freeze-PAST  
 I froze some water.

しかし、両者は常に交換可能というわけではなく、*-da* のみが可であり、*tlə-* の使用は不可とされるものもある。

- (50) a. *Gandlaay 'la sk'alju-da-gən /\*tlə-sk'alju-gən*  
 the.water 3 boil-CAUS-PAST  
 He boiled the water.
- b. *quginaay 'la Gu-da-gən /\*tlə-Gu-gən*  
 the.paper 3 burn-CAUS-PAST  
 He burned the paper.
- c. *Gaanaay 'la skaa-Guy-da-gən /\*tlə-skaa-Guy-gən*  
 the.fruit 3 CL-fall-CAUS-PAST  
 He dropped the fruit.
- d. *daalGaay ?aŋGa 'la gəw-da-gən /\*tlə-gəw-gən*  
 the.money own 3 be.lost-CAUS-PAST  
 He lost his money.

これらは、*-da* をとることがいわば語彙化している故に、*tlə-* の付加が認められないものと考えられる。(50d) は、話者によっては、*tlə-* の使用が認められることもあり、その場合は、「故意に」という意味が含まれる。

一方、*tlə-* のみが認められ、*-da* は不可とされる場合もあるが、*-da* を不可とするかどうかにはゆれがあり、話者によっては、*-da* の使用を認めることもある。

- (51) a. *naagaay 'la tlə-skunχa-gən /\*skunχa-da-gən*  
 the.house 3 CAUS-clean-PAST  
 He cleaned the house.
- b. *qalgaay 'laa tlə-sGəw-gən /\*sGəw-da-gən*  
 the.ice 3 CAUS-melt-PAST  
 He melted the ice. [= (38a)]
- c. *machine kaljuu 'la tlə-qaa-gən /\*qaa-da-gən*  
 machine big 3 CAUS-go-PAST  
 He operated a big machine.
- d. *c'aanwaay 'la tlə-k'ilgən /\*k'it-da-gən*  
 the.fire 3 CAUS-go.out[PAST]  
 He put out the fire.

話者によっては *-da* の使用を可とする (51d) を除いては, *tlə-* による使役は, いわば語彙化しているものと考えられよう。尚, ここにあげた (48) から (51) の基底の動詞は, 状態変化を表わし, 動作者 agent の存在を含意しない点において, Haspelmath (1993) のいう “causative” と対をなす “inchoative” の動詞に相当する。通言語的においてこのような対が多くみられることから, おそらくハイダ語の *tlə-* は, まずこの種の動詞に付加されて, 本来の手段接頭辞から徐々に使役接辞としての機能を獲得していったのではないかと推測される<sup>30</sup>。

上の [2] の場合, すなわち, 基底が 2 項動詞の場合は, 考察に十分な例を得ておらず, 特に 2 項動詞に付く *-da* の例は, 上に示したようにほぼ語彙化した (すなわち, それに対応する *giŋ-* の例がない) のに限られている。例えば, (52) にあげるテキストからの用例をみる限り, *-da* が間接使役の機能を担っていたと見做せよう<sup>31</sup>。

(52) a. *gyaan 'laa 'la gə taa-da-s*

and 3 3 INDF eat-CAUS-NONPAST

... and he gave him food (*lit.* he made him eat some). (Swanton 1905: 53)

b. *gaay=sda=haw naad-ə-ləŋ ʔəgəŋ 'la xida-ʔin-daaya-gən*

that=from=FOC nephew-EPEN-PL REFL 3 lower-seaward-CAUS[EVD]-PAST

Afterwards, he had his nephews sink himself in the ocean. (Swanton 1905: 63)

先にあげた 1 項動詞に *-da* を付加してできた使役文において有生物が被使役者である場合 (すなわち(46)) と考え合わせると, *-da* は, 1 項動詞と 2 項動詞のいずれにも付加され, 間接使役的な意味を表わすことが可能であったが, とりわけ 2 項動詞に関しては, 徐々に動作性の低い動詞<sup>32</sup> ((25) から (29) を参照) に限られるようになっていった (あるいは, 語彙化してしまった) と解釈できよう<sup>33</sup>。

#### 4. 結語

以上の考察をまとめると, 2 項動詞が基底の場合は, 基底の動詞の動作性, 使役性, 語彙化の程度によって, *giŋ-* と *-da* の違い (*tlə-* は 2 項動詞には付かない) を下のように表わすことができる。但し, 両者の違いは画然としたものではなく, あくまでも程度の差にすぎないことに注意されたい。

<sup>30</sup> ちなみに, Haspelmath (1993: 97) のあげている “inchoative/causative” の対をみても, ハイダ語においては, 使役の動詞を派生するのに, *tlə-* 以外の手段接頭辞が用いられることもある (例えば, *k'udʔut* ‘die’ に対して, *kus-k'udʔut* ‘stab NP to death’ [*kus-* ‘by stabbing’], *squd-k'udʔut* ‘punch NP to death’ [*squd-* ‘by punching’]). しかし, *tyaah* ‘kill’; *\*tlə-k'udʔut*, *\*k'udʔut-da*。

<sup>31</sup> 但し, (52a) は, *-da* を用いるよりも *giŋ-* の方がよいとする話者もいる。尚, (52b) の *-da* を *giŋ-* に置き換えられるか, あるいはいずれが適切かどうかは, 話者に確かめる機会を得ていない。

<sup>32</sup> すなわち, Nedyalkov and Silnitsky (1973) のいう「抽象的な行為」に相当する (3.1.1 参照)。

<sup>33</sup> Swanton (1900-1 [Enrico 1995]) の話者は, ほとんどが 1800 年代半ば辺りに生まれ, いずれもハイダ語の単一使用者であった。従って, そこに記録されたハイダ語は, 日常の言語として機能していた時代のそれであり, 現在, ハイダ語がおかれた状況と比べるならば, その間に様々な変化が生じたと考えるのは自然であろう。

## (53) 基底：2 項動詞

		<i>giŋ-</i>		<i>-da</i>
動作性	高	←	→	低
使役性	間接的	←	→	直接的
語彙化	低	←	→	高

一方、基底が 1 項動詞の場合は、使役者と被使役者の有生性をまず基本とし、それによって三種の使役接辞の区別がなされ、更に、複数の使役接辞が競合する場合（すなわち、使役者、被使役者ともに有生物の場合は）、基底の動詞の意味特徴 ([Ag], [Ctrl]) によって、それらの接辞の現われる傾向に差が出てくるといえる。使役者が有生物で被使役者が無生物の場合は、*-da* と *tlə-* の両方が現われ得るが、その両方が交換可能であったり、あるいは、語彙的にいずれか一方しか現われなかったりするなど、他の場合に比べ、一層分明ではない（表では便宜的に「～」で示しておく）。

## (54) 基底：1 項動詞

		被使役者	
		有生物	無生物
使役者	無生物	<i>giŋ-</i>	
	有生物	<i>giŋ-</i> <i>-da</i> <i>tlə-</i> [+Ag, +Ctrl] ←                      → [-Ag, ±Ctrl]	<i>tlə-</i> <i>-da ~ tlə-</i>
使役性		間接的 ←	→ 直接的 <i>tlə-</i>
語彙化		低 ←	→ 高 <i>tlə-</i>

使役性に関していえば、*-da* が間接使役から直接使役まで担い得るという点で最も幅が広いといえる。しかし、間接使役に関しては、*giŋ-* がその主な役割を果たし、一方、直接使役に関しては、特に使役者が有生物で被使役者が無生物の場合は、*tlə-* が徐々に *-da* の領域に及びつつあるとみることができるであろう。

## 参考文献

- Comrie, Bernard (1989) *Language universals and linguistic typology* (2nd edition). Chicago: The University of Chicago Press.
- Comrie, Bernard and Maria Polinsky (eds.) (1993) *Causatives and transitivity*. Amsterdam: John Benjamins.
- Dixon, R. M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Enrico, John (2003) *Haida syntax*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- (2005) *Haida dictionary: Skidegate, Masset, and Alaskan dialects*. Fairbanks: Alaska Native Language Center / Sealaska Heritage Institute.
- Haspelmath, Martin (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In:

- Comrie and Polinsky (eds.): 87–120.
- Hori, Hirofumi (2008) Semantic motivations for split intransitivity in Haida. 『言語研究』第 134 号 : 23–55, 日本言語学会.
- 堀 博文 (2011) 「ハイダ語の手段接頭辞について」, 北方言語ネットワーク (編) 『北方言語研究』第 1 号 : 1–22, 北海道大学大学院文学研究科.
- Kozinsky, Isaac and Maria Polinsky (1993) Causee and patient in the causative of transitive: Coding conflict or doubling of grammatical relations? In: Comrie and Polinsky (eds.): 177–240.
- Mithun, Marianne (1991) Active/agent case marking and its motivations. *Language* 67: 510–46.
- (1999) *The languages of Native North America*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nedyalkov, V. P. and G. G. Silnitsky (1973) The typology of morphological and lexical causatives. In: F. Kiefer (ed.), *Trends in Soviet theoretical linguistics*: 1–32. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.
- Shibatani, Masayoshi (1976) The grammar of causative constructions: A conspectus. In: Masayoshi Shibatani (ed.), *Syntax and semantics, Vol. 6: The grammar of causative constructions*: 1–40. New York: Academic Press.
- Swanton, John R. (1900-1) Haida texts, ms. Philadelphia: American Philosophical Society Library. [30 (N1.5)]. John Enrico (ed.) (1995) *Skidegate Haida myths and histories*. Skidegate: Queen Charlotte Islands Museum Press.
- (1905) *Haida texts and myths: Skidegate dialect*. Bureau of American Ethnology, Bulletin 29. Washington, D. C.: Government Printing Office.

### Causatives in Haida

Hirofumi HORI  
(Shizuoka University)

Haida has two causative prefixes, *giy-* and *tlə-* (of which the latter is extended from the instrumental meaning “by hand”), and one causative suffix, *-da*. The present study reveals the differences among these three affixes, which can be observed both morphosyntactically and semantically.

Morphosyntactically, the valence of the base verb constrains these causative affixes; *giy-* can be freely added to any two-argument verb, while *-da* is added to a relatively small number of two-argument verbs. *tlə-* is never added to two-argument verbs. Another difference at the morphosyntactic level can be seen in terms of animacy of causers and causees. *giy-* can be used in causatives with animate causers and causees, when the base verb is designated as [+agency, +control] by semantic features, while the other two can be added to base verbs designated as [–agency, ±control]. *giy-* is also possible in causatives with inanimate causers only when the causees are animate. *-da*

is not as constrained as the other two affixes in terms of causee animacy and the semantic features of the base verb.

Semantically, it is difficult to elucidate the differences among the three causatives, but it is pointed out that the *giy-* causative inclines toward indirect causation and the *tlə-* causative toward direct causation. The *-da* causative seems to cover the widest range of causation, from indirect causation, where it may be interchangeable with *giy-*, to direct causation, where the difference between *-da* and *tlə-* becomes unclear.

(ほり・ひろふみ jjhori@ipc.shizuoka.ac.jp)